

からして、4才代でも文字指導が可能でありかつ有効な成果をもたらすという考え(データ)をもっている。その場合問題なのはプログラムであって、そこでは話しことばの指導と文字指導とを対立させてはいけない。理想的な文字指導のプログラムを組んだ上で結論を出すべきではないか(天野; 九大, プログラムに関連する指摘は、他に横山; 愛知県立大からもなされた。)「国語字力との関連のみみているが、他の字力との関連および、幼稚園での文字指導以外の保育のあり方との関連をみていく必要があるはしまいか(村越; 中央大)「園での文字指導の有無との関連をみているが、本当にそうか、つまり本当に文字指導の有無のせいなのか、それとも園での聞く、話すなどの経験の深さの差とみなされる点はないかどうか(藤田)など、活発にやりとりがなされた。

235(岡, 大野他)に関しては、司会の不手際により討論の時間がなくなってしまったため、質疑応答のみに終わってしまった。「研究をすすめるにあたっては、常にその方法に関して反省し検討しなおし、確かめていく態度が必要だ」という発言に関して、高く評価したい。その上で、問題行動の問題性を明確にしつゝ、問題となる子どもたちの社会階層間の内容分析とすすめるべきではないか、また、異なる子ども間での検討のみでなく、縦断的な研究が必要となってくるのではないか(松本; 立正大)などの指摘が、短い時間ではあったがなされた。

何分にも不慣れな司会のせいで、十分討論がなされなかったのみでなく、司会をすることで精一杯で、記録が不備をきわめ、十分な紹介ができなかったことをおわびしたい。

発 達 (237~245)

- 座長 戸 田 晋・一 谷 彊
- 237 乳児期の母子関係
 —Attachment の形成に関する発達心理学的研究—
 お茶の水女子大学 岡 野 雅 子
- 238 母子関係の成立過程と乳幼児のパーソナリティ発達(4)
 一言語的コミュニケーションを中心とした母子関係行動の分析方法についての検討その1, 目的と方法—
 北海道大学 ○浜 名 紹 代
 " 三 宅 和 夫
 " 伊 藤 則 博
 " 臼 井 博
 北海道教育大学 後 藤 守
- 239 母子関係の成立過程と乳幼児のパーソナリティ発達(4)
 一言語的コミュニケーションを中心とした母子関係行動の分析方法についての検討その2, 結果と考察—
 北海道教育大学 ○後 藤 守
 北海道大学 三 宅 和 夫
 " 伊 藤 則 博
 " 浜 名 紹 代
- 240 親子関係の認知に関する発達心理学的研究
 九州大学 古 川 綾 子

- 241 青年期における親子関係(その2)
 —親子間の対話—

- 三重大大学 ○戸 田 晋
 愛知学院大学 大 西 誠一郎
 " 千 野 直 仁
 " 酒 井 亮 爾
 静岡大学 石 川 透
 " 田 中 鉄 也
 愛知教育大学 武 上 薫
 名古屋大学 久 世 敏 雄
 岐阜大学 返 田 健
 名古屋女子大学 三 輪 弘 道
 " 平 林 進

- 242 青年期における親子関係(その3)
 —親子間の対話—

- 愛知学院大学 ○千 野 直 仁
 " 大 西 誠一郎
 " 酒 井 亮 爾
 三重大大学 戸 田 晋
 静岡大学 石 川 透
 " 田 中 鉄 也
 愛知教育大学 武 上 薫
 名古屋大学 久 世 敏 雄
 岐阜大学 返 田 健
 名古屋女子大学 三 輪 弘 道
 " 平 林 進

243 同胞構成と性格 (1)

— 出生順位を中心として —

綾部市立東八田小学校 ○井 上 文 子
京都教育大学 一 谷 彊

244 同胞構成と性格 (2)

— 因子分析的検討 —

京都教育大学 ○一 谷 彊
綾部市立東八田小学校 井 上 文 子

245 出生順位と性格特性

広島女子大学 稲 田 準 子

I 全体的特徴

(1) 以上9つの発表で、発表取消しなし。討論参加者(発表者を含む)は、最多時において80名余りにのぼり、最終的にも50名前後の参加者で質疑応答、討論を重ねることができた。

(2) 当室での発表は、母子関係、親子関係、ないしは同胞関係など家族関係や家族力動の性格形成に及ぼす効果を発達的にとりあつかったものに集約されており、発達段階的にわけると、上記の内容に関して、乳幼児をとりあつかったもの(237, 238, 239, 240,)、中学生をとりあつかったもの(245)、大学生をとりあつかったもの(241, 242)、これらをあわせてとりあつかったもの(243, 244)となっており、討論も焦点化されたと思われる。

(3) 討論時間は11:45~12:30の45分間で、9つの発表を一応、3つずつに大まかに分け(発表順に従って)15分間ずつにした。しかし、最終的には、とりわけ、方法論上の問題に論議が集中し、隣接領域的な立場の研究者の参加もあって、実りの多いものであり、司会者の方で、時間的制約からやむを得ず終了という形になるほどで、短時間ではあったが熱中した論議がかわされた。

(4) 質疑・討論の内容は、主として、(i) 発達の観点からの特定行動のとらえ方の問題、(ii) 被験者の選択に関して、それを吟味せずに直ちに資料から一般化した言及へ持ち込むことへの問題、(iii) 各種の従属変数(クライテリアン・メジャ)のとらえ方の問題、(iv) 観察場面等、いわゆるシチュエーションの設定と測定値との関係、(v) 調査法の場合においては、たとえば生活領域等の設定の仕方の問題などといったふうに、総じて方法論的な側面に集中したことは、上記(3)でも記述したとおりである。

II 討論の内容

発表順に質疑・討論の内容と応答とを記述する(発表者と討論者の敬称略)。

237(岡野): (山田)より問題児の面接の場合、これらの主訴はとうであったかとの指摘があり、(岡野)はこれに対して、3才児の検診なので、重度の障害のあるものはみられなかった。せいぜい憶病・神経質といった程度のものであったことが回答された。また、アタッチメント行動の出現率、出現の月令、いつごろ出て、いつごろなくなるのかが十分でないように思われること、アタッチメントについて12項目を選んでいるが、乳児期においては、これで十分なのかなどの討論がかわされた。これらについて(岡野)は、1才前後の子どもを中心としているために、今あるか? いつごろからであったか? などのきき方で回答を求めたこと、また、ある時期にはあったが、今はなくなっているという点などについては、アタッチメントの形成の段階を主として調べているので、かつ、横断的研究であるためにうまくいっていない面もあるが、今後検討したい旨の応答があった。項目数については、たしかに十分ではないが、現研究の段階では一応支障はなかったように答えられた。また、(田村)から、母親の職業の有無との関連について質問されたが、これについて(岡野)は、昼間に団地へ行って面接をしたので、有職者の中には教員、公務員、学生、内職者等もあったが、問題としている1才前後においては、母親で有職者は少なかった旨答えられた。また、object attachmentは、breast feedingとの関係がつよいと言われており、いわゆるcontactがattachmentの重要な要因と思われること、母乳の期間とobject attachmentとの関係が有力だとの説があるがとの討議については、(岡野)は、これについて相関を求めたところ、母乳の期間(長さ)としてとらえたものでは、0.25であったと答えた。(岡山)からは、面接が何分ぐらいで、どのようなきき方であったかとの面接法の具体的方法につき質疑があった。(岡野)は、これについて、たとえば、「お子さんが、あなたをみつづけて目で追うことがありますか?」、「それはいつごろか?」といったふうにきいたが、追想法であったため、視覚的定位が落ち、忘れてしまっている母親もあったと回答した。

238・239(浜名・後藤ら): (三宅)から観察の具体的方法について質問があり、(浜名)からは、サマー・キャンプの時に、比較的せまい一室において、母親と子を入室させ20分ぐらいの自由遊びとして観察した

旨答えられた。また、(稲田)からは、その際の場面の設定状況と親への指示についてどうであったか、観察時間をあらかじめ指示したかなどの質問があったが、これについて(浜名)は、自由に遊んでもらうように指示し、時間については特に指示しなかったが、室内には、ブロック、おもちゃ、週刊誌程度のものを置いたので、母親のうちには、週刊誌を読んでいるものもあれば、時間一杯子どもに回答しているものもあったと答えた。付加的に、(三宅)から、ここで対象としている子どもについては、観察場面はきわめてナチュラルであった旨答えがあった。というのは、これらの母親は妊娠中から来ていること、ホーム・ビジターもよくいっていること、家庭での不十分な観察でやっていたものを質問紙や面接でやったがそれが不十分なので観察場面を設定して行なったことなどが回答され、3才児においては、はじめてその状況にはいっていることで、多少の緊張感が伴っていたことなどが回答された。

240(古川): これについても、とりわけ方法論上のことが論議され、どのようにして調べたのかが論議の焦点となった。これについて(古川)は、現実については、「ほめてくれるか」などについて「はい」「わからない」「いいえ」の3件法で、理想については、「どんなお父さんか、いいと思うか」を同じく3件法でたずねたこと、また、小2以上では集団面接、幼稚園児では個人面接で行なった旨回答した。さらに、項目については、先に日本心理学会で発表したように、因子分析にかけたときの標本が小学生(小4, 6)になっている。項目はしたがって、小学校でP, Mの項目が出るのかと思っていたがそうではないようである。理想と現実であるから、子どもの発達段階により変わってくるようである。したがって、質的なものについては出るが、量的な変化として出たのは小4, 6を対象として項目を作ったためと思われる。このようにして、2つの要因が重要だと思っても、中味については、これから検討しなくてはならないと思っているということが付加的に答えられた。

241・242(戸田・千野ら): 発表時間の関係上、(千野)から、因子軸について補足説明がなされたのちに、質疑・討論が行なわれた。まず、10の領域についての選び方が質問されたが、これについて(戸田)は、最初の段階において、親子の対話の領域としてはどんなものがあるかを自由記述で調べたこと、それにもとづいて、親と話しあうこと、話しあわないことを中心に、

一応10領域にまとめるのが妥当と考察したことを述べた。これに対して、自由記述法で抜けている領域のある可能性について質疑されたが、(戸田)は、何回かに亘って調査したので、ほぼ網羅されていると思う旨回答した。この発表については、青年期的特性からくる質問紙法への回答についてこれまで論議されてきているような問題点について、これをどう克服したかについての論議がなされる方向には向かっていたが、発表内容の豊富さから、補足的説明にやや時間を要したため十分な意見の交換が行ない得なかったことは、座長の不手際もあって申しわけないことであったと思っている。

243・244(井上・一谷): (依田)からは、同胞関係については、年令的間隔、同胞数、性構成等いくつかの規定要因が予想されるが、日本の場合においては、性構成が大きいのではないかとの見解、(田村)からは、養育者たる母親そのものの養育環境における性構成の影響等も考慮すべきでないかとの見解、(星野)からは、社会学的技法としての家族内における役割行動を開発すべきではないか、そうすれば、隣接科学の研究者にも役立つだろうとの見解などが披歴され、(井上)が、今回の研究では、その点はわらいとしていなかったのと言及しなかったが、データとしてまとめたものには、たしかにその点についてみたものがあることについて一部報告をした。また(一谷)からは、心理学的アプローチからすれば、できるだけ諸要因を統一にするための努力の結果、すべてを言及しにくいことについて、隣接領域の研究者の示唆を仰いだ。

245・(稲田): 興味深い資料が提供されており、条件統制も適確で、多くの含蓄と示唆に富んだ研究であったが、時間的に十分討論をつくしえなかったことは研究者に対して申しわけないことであった。考察的には、本邦における社会的特質、とりわけ、わが国における長男尊重、男子尊重の伝統的風潮を明確化しておられ、参会者の共鳴をよんだと思われる。

総じて、最初に言及したように、この部門での研究が、親子関係、母子関係、同胞関係が性格特性などに及ぼす影響を追及しようとするものであったため、これまでの研究面からみて、方法論的なものに論議が集中し、今後への研究に示唆に富んだものであったが、時間的制約から内容面に深く立ち入って十分に論議を尽し得なかったことは残念であった。